

永続する死／詩——1960年代の琉大学生運動と中屋幸吉

Lasting Death / Poem:
1960s Movement among Ryukyu University Students and Nakaya Kokichi

松田 潤*
Jun Matsuda

Abstract

In this paper, the topics concerning of mourning and melancholy are discussed in reference to “Namaeyotattearuke Nakaya Kokichi Ikousyu”(1972). First, the potential and limit of Nakaya’s participation in Movement at Ryukyu University though 1960s which was triggered by the death of his niece in the incident of 1959 Okinawa F-100 Crash will be examined in a historical context. I will further examine that the movement was aiming to overcome an aspect of its sectionality and inflexibility and to criticize the significance of Reversion Movement in Japan in the context of historical trend in Neo-leftism. Secondly, Nakaya’s journey for 40 days in his “motherland Japan” was the second trigger after the death of his niece to change his perspectives. Nakaya’s arrest for occupation in Legislature of the Government of the Ryukyu Islands was evaluated to be separation from representative politics and to be in the process of population becoming “people”. Lastly, the poem of Nakaya’s which was believed to be Nakaya’s fail in political conflicts should be dealt. Nakaya endeavored to perpetuate his poem and death by the means of opposition to the contemporary political system. In addition, whether the way of incorporation of the trace of alterity and endless mourning work or not should be.

I. 遺稿集を読むということ

中屋幸吉が1966年6月に沖縄県中部にある知花城で自殺した後、中屋の手による日誌、詩、短編小説、評論、新聞記事、ガリバン刷同人誌「くずてつ」の発刊宣言などさまざまな記述が友人たちの手によってまとめられ『名前よ立って歩け 中屋幸吉遺稿集』として出版されたのは、「日本復帰」直後の1972年6月であった。中屋は1937年に沖縄石川市で生まれ、1959年に琉球大学に入学してからは政治闘争に参加し文学を志すも、26歳という若さで自死しこの世を去っ

* 一橋大学大学院言語社会研究科博士課程、The doctoral course of Hitotsubashi university Graduate School of Language and Society
Email: ld131016@hit-u.ac.jp

た。遺稿集の解題「一つの終焉」¹では、中屋の生涯は沖縄戦と米軍占領という「戦争体験」を共有し、運動へ身を投じていった世代の「典型」として語られ、戦後世代の「自己覚醒史」に重ね合わされる。また、この遺稿集の出版は、「政治的、思想的立場を越えて、中屋幸吉の死の意味を広く共有し、沖縄における中屋幸吉の死を広く問いたいとの願いにもとづく」とも述べられているように（中屋 1972：317）、中屋の死を立場や世代を異にする人々に向けて開いていくことを企図するものであったことが伺える。しかし、解題がまさしく指摘しているように、中屋は「死においてさえも一切の理由づけを拒否し」たのであり、遺稿編集委員にとっても「復帰」を跨ぎ四年に及んだ遺稿を集め編む作業は、むしろ中屋の死の意味をいっそう見失っていく過程そのものだったのではないと思われる。はたして、中屋の死に意味を与え、そしてその死を共有することは本当に可能だろうか。

中屋は、1959年6月に起きた宮森小学校米軍墜落事件で姪を亡くし10月には大学を休学している。17人が死亡し、210人を超える負傷者を出したこの「石川ジェット機墜落事件」とも呼ばれる事件について、死体鑑定に立ち会った中屋は自ら「思想の転機」と語り「姪の死」という小説を書き残している。

足がない、ない。手は、それもない。手首から先が、消え失せている。男かな、否、女だ、あ、性器がない、なにもないのだ。あ、目の中は、焼けた砂が一杯つまっている。焼け崩れた鼻、そこも一杯の砂だ。臓腑は、臓腑は大丈夫だろうか。あ、ない、ない、臓腑がからっぽだ。[……]

こうも怖ろしい人間の形相を、彼は、死ぬまで、忘れることができまい、と思った（中屋 1972：32）。

2004年の沖縄国際大学ヘリ墜落事件がすぐさま宮森小学校の事件を想起させたように、中屋の姪の死は一回性の固有な死でありながら、戦後沖縄においてまたその時空間を飛び越えて繰り返されている死であり、未来に先取りされた死でもある²。姪の死後、「外部にあるものが、自己におよぼす、力の強さ」を思い知らされ、帝国権力を「肌身に感じた」と語る中屋の根底には、常に姪の死が「深い傷痕」となって残っていた（中屋 1972:33-4）。このような犠牲者自身にとっても了解不可能な暴力によって到来する死という出来事に直面してしまったとき、中屋のような遺された者は、死の想起を通して自らの生を再組織していく「喪の仕事（mourning work）」がどこまでも困難なものとなるのではないだろうか。中屋にとって姪の死とは、意味を与え理解し共有できるような死では決してなかったはずであり、癒えることのない「傷痕」となってしまうまでも回帰してくる出来事だったと思われる。

ジュディス・バトラーは、『権力の心的な生』において、フロイトによる喪とメランコリーの区別³は決定的なものではないとした上で、「メランコリーが示しているのは、他者を自分自身と

¹ この解題は比屋根照夫によるものであり、後に比屋根の書『戦後沖縄の精神と思想』（明石書店、2009年）に「一つの終焉——沖縄の戦後世代中屋幸吉の軌跡」として収録されている。

² 田仲康博が風景の〈裂け目〉と呼んだ時空間を飛び越える「さまざまな〈暴力〉の現場」は、「戦後」も沖縄の風景を穿ち続け、沖縄に生きる人々を殺し続けている。田中によれば沖縄では一貫して「戦後」が不在であり、植民地主義的暴力による「例外状態」化が継続されている（田仲 2010）。

³ フロイトは対象喪失の心的プロセスを正常な「喪（悲哀）」と自我の分裂にいたる「メランコリー」に区別した。喪においては、「愛する対象がもはや存在しないことが分かり、すべてのリビドーはその対象との結びつきから離れることを余儀なくされ」、この分離に対しては「当然の抵抗」が生じるが、「時間と充当エネルギーをたくさん消費しながら」リビドーの備給を断ち切る「喪の仕事」によって「正常」に喪失を克服していく。一方メランコリーも「愛する対象への喪失の反応」でありながら、「[メランコリーによる] 対象の喪失は自我の喪失に変わり、自我とその愛する者との葛藤は自己批判と自我—

して同化することによってのみ、人はともかくも何かになるということだ」と述べ、さらに自我を生み出す「他者の痕跡」について語っている。バトラーが言うように「生存とは、自分自身の出現を創始してくれる喪失の痕跡を素直に認めること」であり、自我とはそのような「他者の痕跡」の忘却において成立するアイデンティティのことである。そうであるなら、中屋の遺稿を読む私たちに求められていることは、姪の死への不可避の回帰の時間を生き続け、生存の淵で「傷痕」を体内化していった中屋と同様に、「他者の痕跡」として中屋のテキストを読み、意味付けや共有の不可能な中屋の死を認知不可能なままに体内化していくことではないだろうか。そのようにして他者の痕跡を受け容れることはまた、「決して完了しえない喪の過程に着手することである」（バトラー 2012：238-9）。

本稿では、中屋の遺稿集を読むということを、そのような終わりのない喪の作業として位置づけたい。そのためには、まずは姪の死を契機として中屋が身を投じていった当時の運動が持っていた可能性と限界を再度検討し直すことが必要である。その上で、運動と組織から「離脱」していくなかで記述された中屋のテキスト群、とくに詩的言語と死の関係について考察すると共に、そうしたテキストを読む読者の主体についても論じていく。

II. 琉大学生運動の復活

中屋とそのテキストについては、組織で活動を共にした新城兵一が、「戦後沖縄の民衆の生存の共同性と精神風土からさげがたく離反して生きざるを得ない実存の孤独と宿命」と端的に言い当て、次のように述べている。「[生]（政治）への意志と文学の夢は対極的に分裂したまま、ひとつの体のなかに混沌と内在し、その存在と感受性の基底の深みには、あらゆる生存の秩序を根源から否定し尽さねばやまぬ死への想念がかくされている。[……]「本来的な生の全体性」への激しい希求は、死＝文学の情念の爆発へと緊密に連絡されている」（新城 1993：190-200）。つまり、沖縄という共同性から離反して生きざるを得なかった人間にとって、「本来的な生の全体性」への到達はすなわち死であったということである。その他にも、新崎盛暉が中屋の思想を個人の内面における復帰思想から政治的表現をとることのない反復帰論的思想への転換として戦後沖縄思想史の中に位置付けたのに対し（新崎 1967, 新崎・中野 1967）、新城郁夫は「復帰運動と反復帰論との葛藤のなかでいかなる「思想的変容」を遂げようとしていたか」を問い、「セクト的スローガンから逸れていく言葉と思考の矛盾の可能性」を、当時の沖縄における「民族」「階級」「主体」といった概念に生じる亀裂として読み取っている。新城は、新崎の用いた「政治的表現」という言葉そのものの再考の必要性を指摘し、「中屋に関わって言うならば、むしろ「六〇年代前半」の沖縄という文脈における主流的「政治的表現」への否定性において、逆説的に、政治に新たな表現の地平を開こうとしている」と述べている（新城 2014：92, 105）。本稿においても、復帰思想から反復帰論的思想へと向かう発展史観において中屋の思想を捉えるというよりはむしろ、革命と文学を志した青年たちの思想をいま一度当時の時代状況へと差し戻して再考することから、「政治と文学」が徹底的に変容を遂げていく足跡を歴史化したいと思う。

中屋は、沖縄の絶望した状況の変革を帝国権力との闘いに見出し、琉大マルクス主義研究会（マル研）とその活動の基盤になっていた琉大学生新聞部に所属しながら一度は「祖国復帰運動」

—同一視され変わった—とのあいだの分裂となる」とされる。つまり、メランコリーにおいては誰を喪失したのが分からず、対象とナルシズム的に同一化し、自我は「自己批判」と「同一化された自我」のあいだで分裂する（フロイト 1970：138-142）。

に傾倒していった。1959年10月に大学を休学して発刊したガリバン刷のサークル誌「くずてつ」の1号には、ユートピアとして思い描かれる「祖国」への熱烈な思いが綴られている。

民族意識なき民族——それはその民族の存在を全く不可能にする。世界各国は各々異なった民族集団に依り、構成されているのであり、民族の繁栄発展を希願として独立した国家的生計を営んでいる。今日の琉球が異民族支配下という異様な政治形態下にあるし、我々は異民族に対して我らの生命、生活を庇護、保障してくれとは強要依頼出来るものではなく、相手もその義務を果たされない。我々の生命は同民族である祖国日本本土に庇護されてしかる可きなのだ、ここには我々が日本復帰を絶叫してやまない根拠があるのだ。それを自覚することが必要なのである（中屋 1972：302）。

中屋が「祖国日本本土」による庇護を求め、「日本復帰を絶叫」していた1950年代末、「日本復帰促進期成会結成」（1951年）以来高まりを見せていた沖縄における「復帰思想」は、「島ぐるみ闘争」の挫折（1956年）やドル通貨への切り替え（1958年）による経済的混乱を経て、過渡期を迎えていたといえる。新崎が言うように、期成会の再建ともいえる「沖縄県祖国復帰協議会」（1960年4月結成、以下復帰協）の基底にあった思想も復帰思想であったことには違いないが、その思想は暗黒時代とも呼ばれる米軍の強権的な「弾圧下において民族主義的純化を強め、島ぐるみ闘争のなかで全面開花した復帰思想とは、いくらかおもむきを異にして」おり、「この表面化しにくい復帰思想の変容は、民族主義的純度の希薄化と表現してもいい」ものであった（新崎 1967：214）。中屋のその後の復帰運動批判へと至るドラスティックな思想的変遷も、この時期の復帰運動、復帰思想の変化と重ねて見る必要があると言えるだろう。

こうした復帰思想の微妙な変化を背景に、第2次琉大事件（「島ぐるみ闘争」において反米デモを行った琉球大学学生に対する退学・停学処分）以来低迷していた琉大学生運動も水面下で組織化が模索されていく。人民党（非合法共産党）の琉大細胞として土地闘争を闘った学生たちは、清田政信らが「脱党」して『琉大文学』及び同人誌『詩・現実』における評論と詩作に活動の場を移した一方で（清田 1981：104）、1957年の瀬長那覇市長公職追放事件をきっかけにして「先進的學生が結合し」、1958年に「歴史学研究会」や「反戦学生同盟」を立ち上げた。しかし歴史学研究会は「琉球大学学生心得第一八条」によって定められた基準（「学生又は学生の諸団体が集会をしようとするときは、補導教官又は顧問教官の助言を受けその期日二日前までに副学長の承認を得なければならない」）をクリアできず自然消滅し（琉球大学 1957：25）、反戦学生同盟もスパイの密告で当局の圧迫を受け解体へ追いやられていったとマル研の理論的支柱であった山里章は述べている（山里 1967：8）。

その後学生たちの一部は新聞部に結集し、合法性を獲得した上で大学当局の検閲／監視に「伏字新聞」を発行し抵抗を試みたが（我部 2012）、人事面での揉め事から一時活動は衰退する（琉球大学 1961：188）。学生運動再建の転機となったのは、同年10月に行われた学生会長選挙で国文科3年の幸喜良秀が立候補し、無投票当選で会長に就任してからのことである。1957年から1958年の間には学生総会が何度か流会になるほど一般学生の学生会活動への関心は薄れており、この無投票当選もその現れであったが、演劇部の幸喜に牽引された新役員による学生会活動方針が明らかにされると、学生会は活気を持ち始める（琉球大学 1961：186、我部 2012：541）。学生会は大学当局に復帰協への加盟を禁止されていたが、翌1960年4月28日沖縄タイムスホールで行われた復帰協結成大会後の「大日章旗ひるがえした提灯行列の参加者約4分の1(700人)は琉大の学生であった」ことを受けて、琉大当局も加盟は好ましくないとしながらも一定

の留保を見せたため、5月12日の臨時学生大会において全会一致で復帰協加盟を決定した（新崎 1967：215）。新崎は「この久々の学生大衆の登場に、安保闘争の影響」のみならず、「李承晩を倒した韓国の学生デモや、遠くはトルコの学生の反政府デモなど、世界的激動の余波」が沖縄にも及んでいることを指摘している（新崎 1967：215-6）。後述するが、この学生たちの動きは、世界的な新左翼ムーヴメントの潮流の中で捉えなおす必要があるのと同時に、その差異も明らかにしなくてはならないだろう。

前述したように1960年代に入って復帰思想の民族主義的傾向は希薄化していったが、学生たちの運動が復帰協ならびに復帰運動における民族主義を批判し、「復帰運動批判という異端の思想へ」（新崎 同）と転回した契機は、6月19日のアイゼンハワー米大統領に対する復帰請願デモに見出せる。復帰協は「静かなデモ」の組織を目指したが、全学連の6・15行動⁴を高く評価していた琉大学生会の一部は琉球政府玄関前で「激しくデモを展開」したため、アイゼンハワーは予定を切り上げ韓国へ去った。学生会及び新聞部を中心とする学生たちのこの戦闘的な行動は、全学連への共感と支持に貫かれたものであった。1959年11月27日の安保改定阻止国民会議第八次行動を組織したのが共産主義者同盟（ブント）・全学連であることが伝わった時、新聞部にいた山里はその衝撃についてこう述べている。「共産主義者同盟！それは一種の電撃であった。われわれの眼はいっせいに「共産主義者同盟」にむかっていった」。続けて全学連に対する当時の自分たちの表面的な理解を自己批判している。「だがこの段階におけるわれわれの全学連・共産主義者同盟の把握は全く行動主義的であり、『このように闘わないと勝てないのだ』というような単純実践主義であった。我々の関心は次第に「民族」運動から「プロレタリア運動」にうつりつつあった」（山里 1967：10）。つまり、学生たちは民族主義的な復帰運動に全学連経由のプロレタリア連帯に基づく運動を持ち込んだと言えるだろう。

1960年9月には「琉大党細胞は党との決別を宣言し、ML主義者委員会結成へと進んだ」（山里 1967：11）。その後学生たちは10月20日の浅沼刺殺抗議無届デモを行い会長の幸喜以下3人が起訴され⁵、同月会長選で任意出頭を主張していた「右派」に敗れるに至り、1961年1月21日、「あらゆる政治勢力から決別した部分が自らの組織的拠点の確立をめざして、琉大マルクス主義研究会（琉大マル研）を結成」（新崎 1967：219）、結成直後の2月2日ナイキ反対・任命主席打倒デモ⁶、5月17日の渡航拒否抗議デモ⁷へと展開していった。マル研の結成およびかけ文はその思想

⁴ 安保条約の自然承認が迫っていた1960年6月15日を国民会議は統一行動日と設定し、ブント指導部は国会構内への再突入、無期限座り込みをする方針を立て学生たちを先導した。8000人が国会を取り囲み、うち5000人ほどが構内に入ったと言われているが、右翼による襲撃、警官隊との衝突によって流血の惨事となり、この中で樺美智子が死亡した。

⁵ 1960年10月12日、社会党委員長浅沼次郎が右翼少年に刺殺された事件に対して、沖縄でも10月20日抗議県民大会が行われたが、実行委員の手落ちでデモの届け出がなされていなかったため、布令132号「禁止される又は許可を必要とする示唆行進及び集団行列並びに罰則」を理由に那覇署の許可がおりず、実行委員はデモ中止を決定した。これに対し琉球大学学生会は「布令をのりこえ、弾圧に屈せずデモに起とう」と緊急動議を提案し、布令を無視してデモを執行した。その後、那覇署は「布令違反」を理由に学生会指導者9人を任意出頭させ、最終的に会長以下3人が琉球巡回検事局によって起訴された。この事件については、山里『逆流に抗して』において任意出頭拒否をめぐる闘われた「学内ろう城闘争」に関する詳しい記述がある。この闘争を通して「琉大学生運動にあらたな分裂と再生が生じ」、「戦闘的學生・労働者との実践的結合」を目指す琉大マルクス主義研究会結成が準備された（山里 1967：13-4）。その他事件については、沖縄タイムス社（1983、1990）を参照。

⁶ 1961年2月2日、マル研の主催で米軍のナイキ発射実験阻止と実験に共謀する大田任命政府の打倒を訴え労組員を含む500人を組織し、主席公舎門前で500人の警官隊と数度激突しながら2時間余りにわたって座り込みを執行した（山里 1967）。

⁷ 1961年5月17日、米民政府による復帰協の本土派遣代表13人中5人への渡航不許可に対して、8000人の労働者と学生が結集し抗議デモが行われた。マル研の学生は「主席公舎内抗議をかちろう」と呼

を端的に表明している。「マルクス・レーニン主義の理論によって武装され、世界革命＝世界ブルジョアジーの打倒をめざす中で日本ブルジョアジーの手先＝太田任命政府の打倒を闘いの任務として位置付ける」（山里 1967：17）。つまり、日本ブルジョアジーによる沖縄の国内市場への再組織化が顕在化し、沖縄地域資本も日本資本の一員としての自己本来の姿を取り戻すべく米軍権力を利用しつつ資本蓄積を推し進めている中で、米軍権力との闘争は、敵権力の本質である自国資本（日本政府とその沖縄における現実形態である琉球政府）の打倒なくして不可能であると認識したのである。新崎の整理によれば、復帰運動に反旗をひるがえしたマル研の政治的基軸は日帝自立論と行動的ラディカリズムに要約することができるが、ブントの当時の日本の現状規定でもあった日帝自立論を講和条約第三条下の沖縄に適用するのは特殊な媒介項を一挙に捨象したものであり、きわめて一面的であった（新崎 1967：220）。すなわち、ブントは当時の日本を対米従属国とは見なさず、アメリカ帝国主義から自立した日本独占資本の帝国主義国と認識したが、この日帝自立論もまた高度経済成長政策批判にはなり得ていない点や保守化した労働者に「革命」を託していた点で情勢を見誤っており⁸、ブントの錯誤はマル研の視野狭窄と連動していたと言えるだろう。

その後マル研は活動停止期を経て1965年に琉大反戦会議へと発展的解消を果たし、インターナショナリズムへと傾斜していく。1965年の4・28闘争を目前にして中屋が『琉大学生新聞』に書いた「四・二八闘争は民族主義で闘われていいのか」という記事は、「反米民族思想」を退けつつ、インターナショナリズムを軸とした階級的連帯について次のように述べている。「『アメ公帰れ』『ヤンキー・ゴー・ホーム』を怒号し、異民族への憎しみをもえたざらし、その民族的憎悪で沖縄人民の解放がなされてもいいのだろうか。否、インターナショナリズムとは全く無縁なこの「反米民族思想」で、人間（疎外された労働者、人民）の解放が実現できるのか。はっきりいって答えは、否である。〔……〕われわれは人民党や社会党の民族主義をのりこえ、本土労働者との階級的連帯の下に、米帝の軍事政策に断固反対し、憲法改悪をたくらむ日本政府や琉球政府の合理化攻勢に反対し、階級的反撃に立ち上がり、四・二八闘争に立とう！」（中屋 1972：264）。ここで言うインターナショナリズムは、「一米軍少尉がベトナム前線出動を拒否して軍法会議にかけられたことをきっかけとして、英文ビラで米兵に対し直接反戦の訴えを行う行動に具体化する（65年7月）」ものである。ベ平連がこうした活動に取り組むのは1年後であったことを考えてみても、彼らの行動の先見性は特筆されるべきである。

以上、新聞部とマル研の性格、特徴を要約するなら、(1) 既成左翼＝日本共産党と一体化していった人民党からの離脱と民族主義的な復帰運動に対する批判、(2) 米軍統治下における大学当局の検閲／監視への抵抗、(3) 日本本土の新左翼（共産主義者同盟）への共鳴と理論的依

びかけが、復帰協幹部と人民党はデモ解散を指示した。学生は労働者と分離し孤立させられた末、戦闘的労働者と公舎正門を突破、「瞬間、構内からなだれだした500名の警官と正面衝突、血まよった警官の暴力の中で激しくもみあいすわり込み闘争をたたかい、24名の学生、労働者が検挙された」（山里 1967：22）。

⁸ ブントの理論によれば、岸内閣にとって旧安保改定は、対外的には日本独占資本の帝国主義的威信の回復を意味し、対内的には民族意識を煽ることにより労働者の階級意識を麻痺させ、さらに「日本国家の威信を国民の前に高めることで、その勢いをもって合理化攻勢にでるところに長期的目標があった」（大嶽 2007：59-60）。こうした解釈は講座派的解釈（戦前の軍国主義国家の復活）よりは数段確かなものであったが、しかし、労働者は「高賃金の獲得と大量消費社会の到来によって高度成長の受益者となっており、基本的には経営側を自発的に支持し」保守化しており、彼らを「革命」の主体と設定していた新左翼は情勢を読み違えていた。また、「この労働者の保守化をもたらした決定的原動力は、保守党政府による高度経済成長であり、重化学工業化による日本社会の近代化であった。今日の目から見れば、ブントが直面していたのは、岸の外交防衛政策であるよりは、実は、彼らがもう一方で進めていた（池田内閣を先取りした）高度成長政策であった」（大嶽 2007：96-7）。

抛（日帝自立論と行動的ラディカリズム）、(4) インターナショナリズムへの傾斜の4つを挙げることができるだろう。新崎のいうように彼らの運動と思想はブントの影響だけでなく学生運動の「世界的激動の余波」のなかで位置付けられる必要がある。新左翼の登場はその背景に先進諸国における社会主義の後退や大量消費社会の実現といった事情があった。既成左翼が失ったラディカリズムの復活こそ新左翼思想の基本特徴と大嶽秀夫は述べており、その運動は先進諸国において「何よりも既成左翼に対する批判として登場した」のである（大嶽 2007：15）。その運動形態はアメリカにおける公民権運動や「言論の自由運動Free Speech Movement」、イギリスの核武装反対運動、フランスのアルジェリア戦争反対運動、日本の1960年代の安保闘争などである。既成左翼に対する批判から出発したという点で琉大学生運動もこの流れを汲むものであるが、沖縄における運動はむしろ「先進国」における運動ではあり得なかったし、そもそもいかなる意味でも「国」であったかすら疑わしい。ブントにおける日本帝国主義の復活とアメリカ帝国主義からの自立という認識も、「日本の学生運動が韓国やトルコの場合とは決定的に異なる質、すなわち先進国型の運動であるとの自覚を促すものであった」（大嶽 2007：148）という大嶽の指摘を踏まえるなら、沖縄の運動を日帝自立論に依拠して展開したことは上述のように現状認識の点で何重にも誤っていたと言わざるを得ない。

しかし、琉大学生運動が「島ぐるみ」闘争の敗北の後米軍の支配が苛烈さを増していくなかで登場し、系列化していく人民党に見られた党派的・セクト的な硬直した運動や、復帰協の民族主義の乗り越えを目指したことは評価されるべきである。「島ぐるみ」の再来と言われた主席指名阻止闘争は、琉大学生運動のもち得ていた可能性の一つの到達点として捉え直す必要がある。

Ⅲ. 2度目の「思想の転機」と主席指名阻止闘争

中屋は1960年4月に復学し、翌1961年2月のナイキ反対・任命主席打倒デモや4月の浅沼刺殺抗議無届デモの最終公判の傍聴にかけつける中で、「琉大の前衛的革命思想家共」を見て「負けてはならない気になり」、5月から琉大新聞部及び琉大マル研で活動を開始していた。「日本復帰を絶叫」していた中屋の主張に明確な変化が読み取れるのは1962年からであるが、それ以前の1961年10月19日の「施政権返還要求県民大会」と題された日誌では、政治への隔たりと文学への衝動を次のように記している。「素人が、今日明日にも、政治を変革しようとする態度は、政治的に無意味である。後になって、その志向のムダを知って、自分を傷つけるのが、オチである。〔……〕 ぼくは、文学の道に、ひたすらいそしもう。この行為が、やがて、政治へのささえとなろう」（中屋 1972：60）。

揺らぎだしていた中屋の「祖国日本本土」への情熱は、1962年7月から40日間本土に滞在したことで決定的に霧散したと言える。中屋は琉大学生会代表として東京での全学連との共闘を目指して鹿児島に上陸した時点では、「色が白い」「話し声までも大きい」「食事がステキにおいしかった」「建物、道路、人間、風景、全てが美しい」ことに驚き感心し、「早く東京へ行きたい。そこには、生きたダイナミックな現実がある」と東京への憧憬の思いを募らせていた。しかし、上京後の8月8日の日誌では「人間存在そのものが革命的イデオロギーそのものに全的に解消されてはならないと思う」と独白している。中屋が東京に見た「現実」とは――

疎外だった。東京という資本主義の集中された場所から、疎外としてはじきだされたのである。〔……〕

東京（都会）、それは、集中化された資本の別称である。そこでの人間は、自己存在理由をその資本機能に全的に服従することによって、その生存が、保障されるのだ。〔……〕

金という非人間的な存在が、この都会地を支配しているかぎり、そしてこのオレの存在が支配されているかぎり、オレの人間主体の確保は望めない。

オレという存在は、いよいよ疎外の集中的産物となろう（中屋 1972：79-80）。

本土上陸の2日前（7月22日）の日誌で中屋は、資本攻勢によって自己主体を喪失することへの抗いとして「『自己否定的論理』の確立」を唱え、「状況となれ合いしているとき、自分は、もはや、「殺す」べき以外の何物でもない」「自ら変革の主体者に位置づけることによって、真の自己変革（創成）は、可能だ」と主張していた（中屋 1972：70）。この時点では自己否定は自己変革のための手段として捉えられていて自殺を示唆しているとは読めないが、東京の集中化された資本に支配され人間主体の確立がいよいよ危機に瀕したとき、中屋における「自己否定的論理」の貫徹は死へと急速に接近していく。8月20日の日誌で「ボクは、現実に関された被害者。従って、この資本制的現実へのボクのアイサツは、死の抗議以外の何でもないのだ」と既に自殺を予告している中屋において（中屋 1972：83）、死は現実の支配に対する抵抗の手段として語られているが、しかし、「現実に関された」「何度暴行されたかしのれない」といったレイプの比喩でここでも「外部にあるものが、自己におよぼす」「力」を示唆している中屋にあって、自殺は新たな主体への意志などではなく、権力による他殺として作用してしまう。中屋の本土体験は、姪の死に続いて2度目の「思想の転機」と呼べるものであったと思うが、この「転機」はいずれも外的な暴力によってもたらされたものであったと言えるだろう。この暴力によって刻印された「深い傷痕」を自ら繰り返していきような安住を許さない思想的深化の果てに中屋が見据えていたのは、「沖縄」そして「オキナワ」であった。9月10日、沖縄に帰る船の中で中屋は書いている。

四十日間も暮らした本土。東京での生活を通じて、常に死の意識の底にうごめいていたものは、沖縄であった。

オキナワ。そう今の私は、沖縄という風土の集約的表現としてしか存在しえないことをつくづく感じる。

沖縄に生まれ、育ったボク。オキナワ、あまりにオキナワ人らしいボク。日本人というには、あまりにオキナワ的なボク。オキナワ的の思惟方法。オキナワ的の現実意識。オキナワ的存在形態とその把握。…

ボクにとって、オキナワは、自分の影である。

現実的に私の精神的表現であるオキナワ、私の故郷オキナワ。私がオキナワでなくなったとき、私は何になるか。

日本人か、国籍不明（正体不明）か。

私の生みの親であり、もう一つの私であるオキナワ。

私からオキナワがなくなる時があるか。

私は、世界人であるべきであり、オキナワ人であっては、いけないか。世界をオキナワからみてはいけないか。世界の内部にオキナワがあるとして……（中屋 1972：96-7）。

本土での経験によって「祖国」を喪失し急速に「オキナワ」への同一化を深めていく「あまりにオキナワ人らしいボク」にとって、「オキナワ」は常に自身に張り付いた「自分の影」であ

りながら、「私がオキナワでなくなったとき」「私からオキナワがなくなる時」とも述べているように喪失を予感させるものでもある。この「オキナワ」への接近と分離の運動に苛まれながら中屋が夢想するのは、「日本人」になることではもとよりなく、「世界人」であり「オキナワ人」であることの両立である。しかし、中屋が鋭く直感しているように、「世界の内部にオキナワがあるとして」という前提条件が成立しない場が当時の沖縄の地位なのであって、戦後の、特にサンフランシスコ講和条約以降の国際秩序という前提条件に照らし合わせてみるならば、「残存主権 (residual sovereignty)」というレトリックによって施政権を米国に掌握されていた沖縄はまさしく「国籍不明 (正体不明)」なのである。

本土から沖縄に帰ってきた後の1962年後半から1963年にかけて中屋は、日誌や詩などの文章を何も残していない。1964年1月2日付の「自画像」という詩から記述を再開したものの、2月の自殺未遂の後再び休学している。中屋の休学の間、沖縄では「沖縄の自治は神話にすぎない」と演説したキャラウエー高等弁務官による布令・布告の連発が相次ぎ（「キャラウエー旋風」）、主席公選闘争が1956年の「島ぐるみ闘争」に匹敵する盛り上がりを見せていた（新崎 2005：112-8）。10月に復学を果たした中屋も「主席指名阻止闘争」においてデモ隊と共に琉球政府立法院本会議場を占拠するに至ったが、出頭命令を受け起訴されてしまう。12月30日付の「不意の関係」と題された日誌で中屋は「政治」によって「犯罪者」として名指され圍繞されていく様子を次のように記している。

確かに「政治」には違いないのだが、それが確かに私とは無縁なはずなんだが、その「政治」が私に近づいてきて、「モシ、モシ。貴方を反『政治』主義者として告発したいのだが……」というんで、私は思わず吹き出してしまった。〔……〕

「一体ケイサツって何者だね。人間ですらないんだろう？ そんな怪物みたいな、いかがわしい物に、人間が告発できると思っているんですか、お前は!!」〔中略〕

「もう、ガマンできません、貴方をいま、『政治』に対する不敬罪として、ただちに逮捕します!」〔……〕

ひどく汚れた師走の夕暮れ、かくて私の身体は、何者かによって、ひそかにさらわれていった。

(10・29～31主席指名阻止闘争に対する出頭命令がくる) (中屋1972：147-8)

建造物侵入や公務執行妨害で逮捕・起訴された中屋を含めた17人は、中屋の死後になって多くは無罪判決を勝ち取るが⁹、彼らは沖縄社会のなかでミシェル・フーコーが言うところの「適切」／「不適切」という分割にもとづく「人口」／「個人の群れ」の水準¹⁰からも溢れ出てしまう余

⁹ 遺稿集解題においては全員無罪判決と記述してあるが(309)、『沖縄大百科事典』では「最終的には七七年一二月、一部に有罪、罰金刑というかたちで落着した」とある(沖縄タイムス社1984：842)。

¹⁰ ミシェル・フーコーによれば、統治性の観点からは、主権者による臣民の統治という分割軸は後景化し、統治技術の対象となるのは自己操導する主体ともなる自然性としての「人口」である。この「人口」は、統治の目標としての適切な「人口」と、「人口」の水準において何かを獲得するための道具・中継ぎ・条件としてのみ可能となる不適切な「個人の群れ」という二つの水準の「人口」に分割される(フーコー2007：52)。土井智義は、このフーコーの統治性の議論を援用しながら「琉球人」／「非琉球人」という差別的な分断統治にもとづく主体編成を、「植民地状態 (colonial state)」の沖縄の「国家化」における「国民」／「外国人」編成の問題として考察している。「米軍占領期においては、まさに統治の目標として主体化される「琉球住民」こそが「人口」の水準であり、一方の「琉球住民」を構成的に支えるものとして、一人一人に対する在留登録が義務付けられた「非琉球人」が「個人の群れ」としての水準なのである」(土井2012：400)。

剩者として位階化されたといえるだろう。

この余剩者の位置は、「人口」／「個人の群れ」についての考察の直後でフーコーが示唆している「人民」の位置を思わせる。フーコーは「人口」という水準を考え出した18世紀の重商主義者アペイユの「人口」／「人民」の区別を次のようにまとめている。「人民とは、人口を対象としてなされるこの管理に対して、人口という水準において、あたかも自分が人口というこの集団的対象・集団的主体の一部ではないかのように振る舞う者のこと、自分がその外部に身を置いているかのように振る舞う者のことである。したがって彼らこそ、自分が人口であることを拒否する人民として、システムを狂わせる者たちなのだ」（フーコー 2007：53-7）。さらにこの「人口」／「人民」という対立は、法律という社会契約に服従する集団的主体／非行者という対立とは似ているようで実は非対称であり、非常に異なっているとも説明されている。この概念が戦後沖縄の統治とそれへの抵抗と響き合うのは、この点ではないだろうか。つまり、中屋らは法を犯した「犯罪者」として逮捕・起訴され「適切な人口」という水準から除外されてはいるものの、立法院の議場「占拠」という行為は法という社会契約＝法を含む新たな植民地体制そのものの欺瞞性を告発する喚起力を備えており、契約を破った「非行者」ではなく「人口」というシステムに抵抗する「人民」としての振る舞いを彷彿とさせるのである。

ここで注目すべきは、「主席指名阻止闘争」において立法院「占拠」という直接行動に及んで逮捕・起訴されたのは17人だけであったが、立法院周辺は数万の民衆に囲まれていたことから、中屋らの行動は決して一部の「過激な」暴徒による暴動として特殊化できないという点である。「島ぐるみ」の運動となって超党派の盛り上がりを見せていた主席公選闘争が、保守派による主席指名という形で切り崩され政局收拾がなされようとしているさなか、主席指名の「阻止」をかけて沖縄の人びとがこれだけ結集したことの意味は大きい。新崎は大田自民党主席の辞表提出から立法院定例議会閉会までの約2ヶ月間、「きわめて限定されたワク内」であったとしながらも立法院が米民政府の勧告を無視して住民の自治機関として機能したことを評価したが（新崎 2005：115）、むしろ「島ぐるみ」という幻想が解かれた後も抵抗が人びとの手によってよりラディカルに持続し展開していったことを評価すべきではないだろうか。換言すれば、立法院を不法に「占拠」した青年たちの行動は、立法院の機能停止による現体制の根源的な否認を行ったという点で、「人口」というシステムの外部に身を置いているかのように振る舞う「人民」的な抵抗であり、さらに「島ぐるみ」という幻想なき後、政党主導ではなく民衆レベルで運動が支持され展開されたことは、人びとが代表政治から自らの手に自治を取り返し、積極的に「人口」から「人民」化していく出来事であったと見なすことができるだろう。

しかし、中屋の行動を「人民」的な振る舞いとして評価できる一方で、「犯罪者」の烙印を押されたことが確実に中屋を傷つけ死へと追いやったことの負の側面も見逃せない。上述の日記のように「政治」は余剩者をどこまでも追いかけ非行者として拘禁し、「不敬罪」として処すことを目論んでいるのである。「不意の関係」と同日の「政治の行方」と題された日記において、ついに中屋は、「搜索願ひ」をだしていた「政治」を見つけ出す。

今日まで、政治のありかを求めて、四方八方、手を尽くして捜しまわったが、ついに見
つからなかった。勿論、搜索願ひもだしてある。

それが、ついこの前、やっと見つかったのだ。驚いたことに、その政治は、私の「内部」にあっ
たのだ！（中屋 1972：148-9）

新城兵一によれば中屋は自死の1年前、「ともに闘いとろうとした革命とその組織から離脱し、

詩と思想の言語を創出する「暗中模索する過程」へと向かうが（新城 1993：190）、自らの「内部」に「政治」を発見するに至って、中屋は既存の「政治」との決別を図ったのではないだろうか。つまり、現実においても組織においてももはや見つかることのない喪失された「政治」を弔い、自らの「内部」に別の「政治」を身体化する喪の営みとは考えられないだろうか。これは、決して合一による「政治」と自己の共死の企みなどではなく、あるべきそして来るべき「政治」への言語を通した狂おしいまでの求めに他ならないのではないか。そして死の予感のなかで、中屋にとって死が書くことと不可分なものとして意識されていることは注目されてよい。

かく、ということは思惟領域の拡大作業である。意識の領域を無限に拡大し、永遠性の空間に、自己を位置せしめようとする行為こそ、死をなりたたしめる条件ではないだろうか（中屋 1972：179）。

中屋においては永遠性と死という矛盾した時間が書くという行為を通じて同時に出来るものとして捉えられている。ここにこそ、死を成立させるといいながら、「死を死なせないこと」¹¹を可能にする条件があるように思われる。

IV. 永続する死／詩

「永遠性の空間に、自己を位置せしめようとする行為」としての詩を考えるにあたって、遺稿集の書名にもなっている「名前よ立って歩け」という詩を検討することから始めたい。

名前よ立って歩け

私の名前を
小川の緑の草むらにひろげ
青空のような安心
とあそびにたわむれたい

にかよった水の流れ
いつもの通り
あくびしながらながれている
この空は
もうだれのものでもなくなった

私のすがたを残したまま
名前が後へあとへ流れていく
名前は

¹¹『名前よ立って歩け』の中の詩「最後のノート」に触発されて作曲した高橋悠治との対談で李静和は、ある死を固定化せず、死を死なせない持続していく追悼のあり方を「客死」という語に関連させて述べている（李・高橋 2009：14）。この対談から多くの示唆を受けた。

さようならと言っている

あそびが冷汗かいている
 名前は
 いっこうに生まれず
 しびれをきらした喪服は
 めいわくそうに笑おうか

ふりあげてみる山
 でっかいその身は空瓶のようにつつ立ち
 風がふきぬけているのに身を
 まかしているよ (中屋 1972 : 13)

ここでまず確認したいのは、タイトルにおける「立って歩け」という命令が一見自立への願いにも読まれるが、自己を永遠性の空間に位置せしめることを呼びかけているとするなら、「名前」が「立って歩く」とは、そもそも「名前」からの解放による「私」の死を暗示していたのではなかったかということである。詩において「私」に願われているのは、「私の名前」を「草むらにひろげ」「安心とあそびにたわむれ」ることであり、その「名前」は「私のすがたを残したまま」「後へ後へ流れ」「さようならと言っている」。「自殺未遂者」や「犯罪者」といった差別的な「名前」が「流れ」去り無名になった「私のすがた」こそ、「永遠性の空間に位置せしめる」ことが可能になった「自己」なのではないか。

1966年4月12日の日誌で、中屋は「名前」そして「し」について次のように書いている。

ぼくの名前は、たぶん、なかや裕になろう。「し」、をかいてから、ようやく一年目をむかえた。「し」をかくのはおそらくぼくが死んでいるからであり、その死は、詩と死んでいる、という意味の「し」に外ならない。[……]
 「し」の代表選手にはなれないかもしれない。しかし、私は、「し」にむかって、無名の長距離ランナーでありたいと願うのみだ。

しかし、「し」の追求とは、実に戦慄たる行為である。「し」の領域で、私は自己の（おそらくは人間の）真実に到達したいと願うのだが、その到達は、即死であるかもしれない。[……]
 とくどき、私のからだはヘソを歪げる。そして「反し」の立場にならんとする。「反し」とは「喜び」への希求だ。

私は、もしかしたら、喜びやしあわせや「愛」のために「し」してのかもしれない。これは私の中の、一真実なのだ (中屋 1972 : 199)。

詩そして死を意味する「し」に向かって、「無名の長距離ランナーでありたいと願う」中屋にあっては、「名前」とは現実の生への拘禁である他はなく、「し」あるいは「反し」こそが「喜び」や「しあわせ」や「愛」への希求となる。自身の生涯からは思い描くことも困難な「幸」という一字をその名に持つ中屋は、詩において「名前」を葬り自己もまた死へと接近していくことで、逆説的な（「反し」としての）「しあわせ」を手繰り寄せようとしたのかもしれない。

ところで、永遠性の空間に自己を位置せしめること＝死を可能にするのがこのような「し」を「書くこと」であるなら、その詩を遺稿として「読むこと」と読者の存在も同時に考察されなく

てはならないだろう。ジャック・デリダは、「署名 出来事 コンテキスト」において、オースティンの言語行為論がコミュニケーションをコンテキストの一義性のなかに回収してしまっていることを批判しながら、エクリチュールの引用可能性を受け手一般の根本的不在、書き手の未来的消滅という観点から説明している（デリダ 1988：21）。エクリチュールが引用可能であること、そしてそれは受け手の「死」の可能性に裏打ちされており、同様の理由から書き手の「未来的消滅」が約束されていることを説得的に説くデリダの説明は、中屋の詩を読む上で、さらに「読むということ」をめぐる読者の問題を考える上で非常に示唆的である。「受け手のかなたで構造的に読解可能で——繰り返し可能で——ないようなエクリチュールは、エクリチュールではない」（デリダ 1988：20）のならば、中屋によって書かれたテキストを読者である私たちが読み、引用し、読解を開始した瞬間にテキストは既に私たちのかなたへ流れ去っている。読むことは書き手の死と読む私の死を同時に到来させることであり、テキストの反復可能性という永続性の運動へ自らを投げ入れることである。そうであるなら、書くことを通じた永遠性の空間に自己を位置せしめることとは、すなわち死／詩を一回性の固有な出来事からひきはがし、読者の死の可能性を媒介に永遠に死に続けるということだと考えられないだろうか。たとえば、1965年10月6日の「日誌」では、「私」が自らの「墓まいり」を行い、繰り返し、繰り返し「未来にまたがって」死に続けている。

墓まいりに行くわ。
 小さく束ねた白菊の花をもって。
 この墓は私のものよ！私は死にしまったのよ！
 耳をすますと
 墓の中の私のかすかなすすりなき。
 コツ、コツ墓の戸をたたく
 でも返事はなくて
 すすりなくだけ。
 未来にまたがって、すすりなきそう（中屋 1972：184）。

文学ジャンルにおける墓の形象は物質としての書物のアナロジーであり（鶴飼 2014）、ここでの自らの「墓参り」というモチーフはすなわち死につつまある読者の読書を想起させる。書き手と受け手の死の反復の企ては、「政治」の暴力によって殺された際の一度限りの死を詩に転じ、読者の死の可能性にかけることによって死に続けることによる「死を死なせない」延命となり、抵抗を永続させていると読まれる必要があるように思われる。「死」と題し中屋は書いている。

——私ハイツモ時代ノ^マ恐迫ヲ受ケ
 テ居リマシタ
 私ハイツモ
 時代ニソグワナイ人間ダッタ

イイエ単ニ
 状況反映論カラノ
 「自殺」トイウ名ノ「他殺」デハナイツモリデス
 少ナクトモ主観的ニハ

私ハ本質的ナ意味デノ
「自殺」デアリタイ [中略]

私タチハ ツイニ
「如何」ナル現実カラモ
自由デハ アリエナイノダ
現実ハ 常ニ
私タチニ ピッタリ
クツツイテクル――

ダカラ
「生」ト「死」トニ本質的ナ相違ガ
アルハズモナク
従ッテ 私ノ「自殺」ハ
一度ヤ二度デスムコトデハナイノダ

私ハ
永遠ノ
「自殺者」

永遠ナル瞬間ニ
(記ス)
(中屋 1972 : 281-290)

「時代ノ恐迫」が、「ピットリクツツイテクル現実」が、「自殺」という名を借りて「他殺」に及んだのであるなら、そしてそのような引用の可能性と読みの可能性にこの詩が開かれているなら、横領することなしに、中屋の「死を死なせない」読みはいかにして可能だろうか。

中屋は政治という異物を体内化する過程でたしかに自己の「内部」に暴力を折り込み死へと接近していくのだが、一方でその過程は絶え間なく「傷」を生成していく時間を合わせて持っている。この傷は暴力の「痕跡」であり姪の死以降中屋を苛んできたものであると同時に、政治という異物を体内に受け入れたことよって生成され析出した新たな物質でもある。死と生成という矛盾した時間を合わせて持つこの傷を成していくことに読み込める可能性を見ていきたい。

陥穽

空がみえないのは
曇天のせいだ という信仰があつて
地面だけみればいいんだ という信仰があつて
うつむきかげんを発想しているうちに
せむしになり
亀裂した地表からの挟撃にあい
私の信仰は 轢殺されていった

今
 信仰の轢死体からかすかに巢立つ
 ほのじろい触手の
 新たな生命への手さぐり（中屋 1972：188-9）

デリダによれば詩とは文字の身体からアイデア性を切り離すことなく、字義通りに「暗記する・暗証する〔心を通じて学ぶ〕」ことを願望させるものであるのと同時に、文字の移送＝翻訳に抵抗しながらもそれを欲望するものである。この翻訳は一つの出来事の到来であり、「それは、ちょうど高速道路の上で球のように丸まっている一匹の動物のようなハリネズミの巧妙さ、引きこもり」に喩えられる（デリダ 1990：252）。

自動車と自動車の現前の中で、ハリネズミ＝詩は身の危険を察知して身を丸め、刺を逆立て身を守ろうとする。しかし、この引きこもりによってこそ、自ら盲目になり、ハリネズミは猛スピードで到来する自動車に轢き潰され＝翻訳されるがままになる。つまり、詩とは心（字義性）の保持と翻訳がぶつかりあう「事故」において、一回性＝唯一性のもんとして、翻訳の刹那に可能になるもののことである。「事故なくして詩はない。傷口のように裂開していないような、だがまた傷つけることのないような詩というものはない。きみから私が心を通じて学びたいと欲望する無言の呪文、声なき傷口を詩と呼び給え」（デリダ 1990：253）。

中屋の「陥穽」における「うつむきかげん」で「地面だけ」みている「せむし」の「私」とデリダのハリネズミは、どちらも轢殺され固有の字義性（中屋の詩においては信仰）が一回性のもんとして失われている点で重なっている。翻訳という事故の後、「私」は姿を変え轢死体の傷の裂開から「ほのじろい触手」を伸ばす「新たな生命」へと変態していることも、翻訳が不完全になされてしまったとの証左であろう。一度限りの「私」の信仰の消失と「新たな生命」への接近という出来事は、永遠に反復される自殺（という名の他殺）を暗示し、「記憶せよ」と呼びかけている。そしてその死後、固有性が喪失されてしまった方の死体の傷口から這い出てくる「新たな生命へのてさぐり」は、オースティンが排除しデリダが「可能性の条件」と呼んだところの寄生者、異常、例外、常に引用の失敗に開かれている「不純」なエクリチュール、出来事ともまた重なるのである（デリダ 1988：32-3）。

さらに重要なのは、事故によって裂開した「声なき傷口」からの呼びかけであろう。生々しい傷を負いつつ繰り返し死んでいく中屋においては、傷とは暴力の痕跡であるのと同時に新たな生成の現場でもある。その傷口から誕生した「新たな生命」は、傷そのものであり、いわば満身創痍の物質となって裂開した身体から私たちに何事かを呼びかけている。おそらくその声は、反復され、中屋の声なのかも不明瞭な、ノイズが混ざった声かもしれない。次のような箇所を読むとき、「声なき傷口」に折り重ねられ「生きる」ことの外部から発せられている複数の他者たちの「イビツ」な声を聞くことが読者には求められているとは言えないだろうか。

生まれおちて、意識にめざめたときから、ボクは「生きる」ことの外側を通過してここまで歩いてきたような気がする。

だから、ボクはひどくイビツだ。この世に、この現実「対決」していく何らの積極的な意思がないのだ。

うんどうには、時にかすかなざわめきを感じることもある。かすかに胸の奥で。

デモの中にあるのは、まるで紙芝居だ。ボクは、自分が救われる方向に歩いていかなければ〔……〕。

追加

日和見者。敗北者。逃亡者。変態者。裏切者。妥協者。陰気者。落伍者。自殺者。発狂者。これらの者に、ふかい、ふかい愛情をしめそう。ふかく愛そう（中屋 1972：168-9）。

読者には「声なき傷口」から発せられているノイズをそのまま体内へと刻んで痕跡化することが求められている。中屋の傷を自らの傷として痕跡化していくことは、決して傷や死の横領ではなく、他者の傷や死を自らの傷や死であるかのように生きなおすことである。中屋の遺稿集を読むことを通して読者は、自己を他者化し、心身を変成へとさらし、「傷」を生成することになるだろう。このような経験は、未だ痕跡とすらならず、意識もされていない他者たち——日和見者。敗北者。逃亡者。変態者。裏切者。妥協者。陰気者。落伍者。自殺者。発狂者——の傷を想像し、喪失を手放さず、悼まれてこなかった「予め喪われた死者」（村山 2006：236）の喪に服し、メランコリーを拡大していくことともつながる実践ではないだろうか。

【付記】

本稿は、大謝肉祭（2013年7月1日、於若狭公民館）およびカルチュラル・タイフーン2013（2013年7月14日、於東京経済大学）における報告がもとになっている。会場の内外でコメントをしていただいた方々に厚く御礼申し上げる。

参考文献

- 新崎盛暉 1967年『戦後沖縄史』日本評論社。
 ——— 2005年『未完の沖縄闘争——〈沖縄同時代史別巻〉1962～1972』凱風社。
 新崎盛暉・中野好夫 1967年『沖縄戦後史』岩波書店。
 鶴飼哲 2014年『ジャッキー・デリダの墓』みすず書房。
 大嶽秀夫 2007年『新左翼の遺産——ニューレフトからポストモダンへ』東京大学出版会。
 沖縄タイムス社 1983年『沖縄大百科事典』。
 ——— 1990年『琉大風土記——開学40年の足跡』。
 我部聖 2012年「琉球大学における表現と検閲」『沖縄文化研究』第38号。
 清田政信 1981年『叙情の浮域』沖積社。
 新城郁夫 2014年『沖縄の傷という回路』岩波書店。
 新城兵一 1993年『負荷と転位』脈発行所。
 田仲康博 2010年『風景の〈裂け目——沖縄、占領の今〉』せりか書房。
 デリダ、ジャック 1988年「署名 出来事 コンテキスト」高橋允昭訳、『現代思想』第16巻6号。
 ——— 1990年「詩とはなにか——心を通じて学ぶ」鶴飼哲・湯浅博雄訳、『総展望フランスの現代詩——「現代詩手帳」三〇周年特集版』青土社。
 土井智義 2012年「米軍占領下における「国民」／「外国人」という主体編成と植民地統治」『沖縄文化研究』第38号。
 中屋幸吉 1972年『名前よ立って歩け 中屋幸吉遺稿集——沖縄戦後世代の軌跡』三一書房。
 バトラー、ジュディス 2012年『権力の心的な生』佐藤嘉幸・清水知子訳、月曜社。
 フーコー、ミシェル 2007年『安全・領土・人口——コレージュ・ド・フランス講義 1977—

- 1978年度』高桑和巳訳、筑摩書房.
- フロイト 1970年「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集六巻』人文書院.
- 村山敏勝 2006年「予め喪われた死者へ——メランコリーの拡大」『現代思想』第34巻12号.
- 山里章 1967年『逆流に抗して——沖縄学生運動史』沖縄問題研究会.
- 李静和・高橋悠治 2009年「死を死なせないこと」李静和編『残傷の音——「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店.
- 琉球大学 1957年『琉球大学学生便覧——一九五七年度』.